

フロイト理論と文学批評 (一)

磯山 甚一

Freudian Theory and Literary Criticism (I)

Jinichi Isoyama

1

19世紀の末に精神神経科の医師として出発したフロイトが、患者の治療のなかで「精神分析」の方法をつくりあげていく過程は、E. Jones の伝記を読むとき、それ自体が興味深いひとつの物語である。人間を理解するために、それまでにはなかった「新しい基盤」をつくりあげようとする様子をまのあたりにすることは非常に興味深い。(1)「精神分析」と呼ばれる方法は、フロイトの経歴の始めの時期にすでに基本的には確立されたと思われるが、その理論づけ、説明のための用語などは次第に変貌を遂げており、彼の理論全体をひとまとめにして把握することは容易ではない。また、「精神分析」は、フロイト以後においても、さまざまな後継者に引きつがれ、発展されており、すでにひとつの理論とは言いにくくなっている。しかも、精神医学者や心理学者によって受け継がれており、その分野の専門外の者が理論全体を理解することは至難のわざであろう。

とはいうものの私個人としては、これまでに文学批評とのかかわりのなかで興味を抱いてきた問題が、どうやらフロイトの理論と親

しみを見いださそうであると考えている。また、フロイトにおける「精神分析」というものが、ひとつの学問 (discipline) としての体裁をととのえているように見えることも、「文学」という、およそ正体のわからない領域に接近するための手段となるのではないだろうか。精神医学や心理学そのものとしてのフロイトを知ろうというわけではなくて、フロイト理論のそなえている現代性を見ようと思う。ということは、彼にとって問題であったことで、私たちにとっても同様に問題となりうる面、すなわち、「言語」の問題と深くかかわっているフロイトを探ろうというわけである。また、私にはそうした面からしか近づけないことも事実である。精神医学についてはもちろんのこと、心理学についてさえ、知的訓練もなければ知識も不十分である。フロイトの理論を、現代の精神医学や心理学の立場から批判するというような目論見はもともとない。言葉の問題とかがわっている範囲で、フロイトの精神分析理論を読みとってみようというわけである。さらには、フロイトの理論の特徴を、言葉にかかわる問題における成果の側から照らし出すことももしかしたら可能になるかもしれない。

1917年の『精神分析学入門』のなかでフロイトは、「精神分析の学問としての特徴は、それが取り扱う素材にあるのではなく、それが使用する技法にあるのです。」と述べさらに「文化史、宗教学、神話学にもその本質を傷つけることなく適用できます。」⁽²⁾と続けている。つまりフロイトにとって「精神分析」がただ単に精神病理学だけのものではないということである。フロイトの理論は、彼がヒステリー患者たちの治療にあたった臨床経験のなかからうまれたのであったが、すでに当初からそれは治療の方法以上のものだったのである。後年になって、「精神分析」の方法によって、宗教や芸術、古代の歴史にかかわる論文を発表したフロイトであったが、重要なことは、精神神経科の医師として出発したその当初から、「医学というまわり道」を通して、「本来の目標である哲学」に到達しようという意図を秘めていたのである。⁽³⁾ここで言われている「本来の目標」は、「メタ心理学」と呼ばれたこともある。⁽⁴⁾彼が臨床医として携わったヒステリーの治療や、精神病理学の研究はすでに当初から、「本来の目標」である「メタ心理学」に奉仕するものにすぎなかった。「若いころには私はただ哲学的知識にのみ憧れていました。そして、医学を去って心理学に移ることにより、今こそその憧れを満たそうとしているのです。治療にかかざらねばならなかったのは、私の本意ではありませんでした。」⁽⁵⁾

このように、臨床医としての自分は本意ではないとしたフロイトではあったが、彼の「精神分析」は、その臨床医として治療にあたった個々の症例の研究を基盤に生まれてきたことも、彼の伝記や、著作を見ると、確かなことのように思える。ただし、理論をつくりあげていく過程において、多数の症例や、それらが治癒したという事実の裏づけが、理

論的検証に先行して提示されているという例が初期の論文に見いだされるのは事実だが、そうした症例の研究がなかったならば「精神分析」もなかったとは言えないであろう。初期の症例の研究の段階ですでに「精神分析」の方法の本質部分はすでにできあがっていたのであって、ある方法が、芸術論や文化論に適用されることによって、次第に確立していったというわけではない。つまり、芸術論や文化論が彼の著作でも後期に多くなされているとしても、「精神分析」の方法が次第に確立されるに従って、そうした他の分野への適用が可能になったというのではなく、すでに初期の段階から、そうした分野への適用の可能性は、その方法自体のなかに内在していた。

ただし、精神分析の方法を、ヒステリー患者たちを治療するために用いるような、臨床場面に適用すると、文学や絵画などの芸術作品との分析者との対話の場を用いるのとは、決定的な差がある。それはすぐにわかることであるが、「芸術分析のほうは自由連想を用いず、またその解釈を、医師と患者との一騎打ちの関係の場に置くことができない」⁽⁶⁾ということである。さらに、臨床的精神分析の場面では、今ではもうあまり抵抗なく受け取られるかもしれない、意識と前意識、無意識、さらには、エスと自我、超自我などの人間における心的なものについて仮定された用語⁽⁷⁾（これらに対応する部位が場所として存在するのではない）も、そのまま、芸術作品の精神分析において用いることには無理がある。フロイト以後の芸術の精神分析においては、作品を夢や患者の症状と同じものとみだてて、作家の精神分析が行われたり、作中人物をほんとうに生きている人物のように扱って分析をしたりした。しかしその後明らかになってきたことは、芸術作品は夢とも症状とも違うものだし、作中人物はつくられた人物にすぎない、さらに重要なことには、文学作品を読むことにおいて、読者

がそこに作家を見いだしたり、そもそも作中人物や物語を見いだすことのなかに、検証すべき多くのことがあるということがわかってきた。紙面上につけられたしみにすぎないものである文字を読むことによって、作家とか作中人物とかについて語るができるのは何故なのか？そうした、より基本的と思える問いを発しないままで、「作者の精神分析」について語ることはできなくなったものと思われる。

精神分析と文学との接点はこうして、結局のところ、「精神分析が文学にかかわるのがふさわしいことであるのは、言語について何らかを語るができるからである。」⁽⁸⁾ということになってしまうかもしれない。そういう観点から、精神分析は、表面にあらわれた意味を、別に隠された意味へと移行していく過程であるという一面に注目してみたい。この過程はフロイトによってさまざまに表現されている。たとえばあるときはそれは「解釈」であり、またあるときは「翻訳」であるとも言われる。その過程は、とりわけ夢の「解釈」において最も明らかである。夢の「解釈」とは、「夢の顕在内容」から、「分析の仕事によって夢の背後に発見されるところの夢の本当の意味（潜在内容）」へと到達しようとするのである。⁽⁹⁾また別のところでは、「夢内容（顕在内容）は、ある夢思想（潜在内容）を別の表現方法に翻訳したようなもの」であるという。⁽¹⁰⁾また、「無意識を意識に置き換えること、すなわち無意識を意識に翻訳すること」とも述べられている。⁽¹¹⁾フロイトの精神分析理論のうちでも、意味の変遷（表面上の意味から隠された意味へ）を扱う、「解釈学」としての一面がここにある。精神神経症の患者の臨床場面について言えば、患者の表わす症状を「解釈」することによって、症状の裏に隠された意味を探ることが治療なのである。解釈されるべきものは、一般に「表象」と呼ばれるが、そ

れには、今述べた症状のほかにも、夢や失錯行為、さらには、文学作品や絵画なども含まれている。

こうした解釈学としての一面においてフロイトの理論は文学との親近性を最もよくそなえていると思われる。フロイト自身、精神分析の方法を見いだしていく当初から、言語の問題にかかわるであろうと予感していたらしい。フロイトは最初、失語症についての研究をしていた。それは、ジョーンズによれば「言語は（ブローカが前頭葉に障害の局在を発見して以来）精神と脳の間何らかのつながりらしく思われる唯一のものとなっているのであるから、フロイトがそれに特別の興味をもったことも十分納得できる。」⁽¹²⁾この興味は、言語そのものへの関心とはならなかったが、そうではあっても、精神分析とは、はじめから終わりまで、「その道具として言語以外のものをもたないところの治療手段（もちろん、研究手段としても）である」⁽¹³⁾ことは一貫して変わりが無い。

意味の問題を扱う「解釈」にかかわる理論としてのフロイト理論において、特徴的なことのひとつとして、storyの回復という面に着目してみたい。たとえばヒステリーの治療において、分析者と被分析者は協力して、無意識のなかに忘れられてしまった記憶を意識に回復しようとする。記憶として呼び戻すべきことがらば、過去において実際に起こったことがらだだったという仮定にもとづいており、ひとつのstoryは、まさに過去において起こってという点において、現在において行なわれる語り(narrative)として回復する以外に方法はない。同じように、夢の解釈においても、夢を語り(narrative)として再構成しなければならない。「解釈され得るのは、夢みられたままの夢ではなく、夢語りのテキストなのである。」⁽¹⁴⁾その夢語りの分析を進めることによってフロイトは、すべての夢が、「願望充足」という形式をそなえた

storyに結局たどりつくともみなした。さらに、精神分析理論の発展の初期においてヒステリーの治療のなかから発見されたことであったが、個人の心的発達において、幼児期においてすべての人が経験せざるをえない story があるという理論がつくられる。いわゆるエディプス・コンプレックスといわれるものが、その storyの中心的要素となっている。

ここにおいて、精神分析的方法と、文学批評などにおける構造主義との接点が浮かびあがってくる。構造主義は、その源流がソシュールの言語学から出たものとされているが、その考え方の基本のひとつは、人間を理解する上で重要なのは、見かけの複雑さにはかかずらわれないということである。人間の行動は、その組み込まれている体系によって規制されているのであり、表面上の差異を取り去ってしまえば、比較的単純なモデルに還元することが可能であり、そのモデルに従って理解することができるという。言語というものが、いかに複雑な様相を見せていようとも、いくつかの比較的単純な規則に従って構成されているようなものである。精神分析の方法も似ている。人間というものは、いかにも複雑な行動を見せているようでも、その発達段階(特に小児期)において、比較的単純なモデルとなる story をたどって発達していくものだと見なすからである。そういう精神分析の方法の特徴を、まず、フロイトが精神分析の方法を見いだしていく初期の段階の著作を通して検証してみよう。精神分析の方法の本質的部分はこの時期にすでにできあがっている。ただ、修正しなければならなかった部分もあったことも確かであり、その修正がいかなるものだったを跡づけることが、そのままフロイト理論の形成のあとをたどることになる。

3

フロイトが「精神分析」という言葉を最初に用いたのは、1896年のことであるという。

(15) フロイトが39才のときのことである。ただし、一般には、1893年から1895年にかけて執筆され、1895年に発表された『ヒステリー研究』が、精神分析的方法の始まりとみなされる。(16) この中の二つの論文、「ヒステリー現象の心的機構について〔予報〕」と「ヒステリーの心理療法」、そして1895年に講演の形でなされ、翌年出版された『ヒステリー病因論』のなかに、精神分析の方法がすでにできあがっている。「無意識」などの言葉も「療法」のなかで用いられているが、まだ局所論としての「無意識」とはなっていない。

「ヒステリー病因論」のなかで、ヒステリーの原因は究極的にはすべての症例において幼児期の性的体験に行きつく、と述べられている。ヒステリーの症例のすべてにおいて幼児期の性体験に原因があるとする説は、1897年になると、フロイト自身放棄せざるをえなくなってしまう。(17) つまり、患者たちが告白していた幼児期の性体験は、大部分が実際には起こらなかったらしいという、「おそろしい真実」(18) に気がついたのだった。ただし、このときまでうちたてていた理論のちの精神分析理論と方法的に変わらない。すなわち、さまざまな複雑怪奇なヒステリー患者たちの症状にもかかわらず、その根源には、いずれの症例の場合においても変わらない普遍的な story が横たわっているというものである。「ヒステリーのどの症例の根底にも……早すぎる性的経験を含む一つもしくは若干の体験が横たわっている……」(19) という主張である。フロイトはこの論文のなかで繰り返しこの主張を述べているが、根拠となっているのは、ヒステリー患者たちの治療にあたって得たところの臨床的事実と彼が考えたものである。このときはまだ「精神分析」とは言っていないが、「分析的方法」によって患者の過去の体験をたどっていくと、「どんな症例から、またどんな症状からはじめた

としても、最後にはかならず性的体験の領域にたどりつくものだ⁽²⁰⁾という。そして、彼が治療にあたった患者たちにとってそうした性的体験は「無意識的回想」として存在しているのであって、その回想が無意識的であるかぎりにおいてのみヒステリー症状を引き起こす原因となるという。⁽²¹⁾ そうした回想が意識的である場合にはその人はヒステリー患者にはならないし、また、患者たちは、無意識的回想を意識的回想に変じていく（すなわち言語化する）ことによってヒステリーの症状からの治癒が果たされたという。

『ヒステリー病因論』のなかでフロイトが主張した、ヒステリー患者たちの病歴においてすべてに共通するという story は次のようになる。まず幼児期に性的な体験をする：その体験が無意識的回想として存在し続ける：ヒステリーの症状があらわれる。しかしフロイトはこの段階ではまだ、何故このような関連ができあがるのかについては述べていない。ただ症例を検証した結果を報告するだけだという。ところが、1897年に至って、患者が告白した幼児期の性的体験の大部分は実際には起こらなかったと認めざるを得なくなり、それまで彼がよりどころとしていた基盤がくずれてしまった。「足場は真実ではなくなってくずれた。」⁽²²⁾ とフロイトはのちに書いた。ただし、この大きな挫折体験あとで、フロイトは、幼児性欲に関する包括的な理論の構築へと向かうのであり、それこそがフロイト理論なのである。すなわち、患者の語る幼児期の性体験は事実ではないかもしれない、しかしそれならば、虚構としてであれそういう体験を患者がつくりあげたということ自体が重要だと気づいたのだった。「もしヒステリー患者がその徴候をたどって虚構の外傷にもどるのであれば、この新しい事実は彼がそういう情景を幻想のうちに創っていることを意味するのであり、精神の真実は事実の真実と相ならんで考慮されねばならないのだ。」⁽²³⁾

という洞察であった。

別の観点から述べれば次のようになろう。「精神の真実」としてヒステリー患者にとって欠かせない幼児期の性的体験とは、無意識を意識化、すなわち言語化するために必要な虚構である。何故ならば、現在の症状を言語化して意識にとりこむためには、因果関係を求めなければならないから、現在の症状にたどりつくためのいわば‘plot’が必要であり、幼児期の性体験はそれを叙述するための「始め」を提供するのである。幼児期でなければいけないのは、個人の歴史においてそれ以上遡げられないそもそもの「始め」が幼児期であるからにすぎないであろう。また、なぜ性体験でなければいけないのかはフロイトが以後生涯を通じて解明しようとしたことである。そのように、「性的なるもの」に彼の精神分析の方法の適用範囲を限定したということが彼の方法の特徴であり、厳密さであったのではないか。

こうして、「精神の真実」を認めたところから、フロイト理論の中核的概念となる「エディプス・コンプレックス」へと歩を進めるのは、さほど遠い道のりではない。フロイトの言うエディプスの状況とは、幼児が、異性の親に対して抱く愛情と同性の親に対して抱く敵意またはライバル意識を、フロイトのことばで言う「精神の真実」とみなしたところに成り立っているからである。

以上のようにフロイトの精神分析は、ヒステリー患者たちの症状の意味を解釈するところから出発したのだったが、周知の通り、フロイトはのちに「無意識」や「前意識」などを含む局所論を展開することになる。この局所論は、そのほかの「抑圧」とか「防衛」などの概念も生み出したが、これらはいずれも、‘story’として仮定した個人の病歴を叙述していくために必要な概念だった。そうした心的な場所の相互の間に働く力関係として個人の心的な側面の歴史を叙述しようとし

たのである。

「ヒステリーの心的機構について〔予報〕」や『ヒステリー病因論』のなかでもすでに「無意識」という言葉は用いられている。しかしこの段階では、「無意識」はのちに展開されるような、局所論としてのそれではない。『病因論』までの段階でフロイトにわかってきたことは、「二重の意識」や「意識の分裂」が患者に認められるという臨床的事実だけだった。そうした分裂した意識を、「防衛」や「抑圧」の概念を用いて関連づけようとする試みはまだなされていない。局所論は、人間の心がいくつかの層に分かれていて、それらがある構造を持っているとみなす点で、やはり構造主義との親近性があるのだが、局所論に到る前の『病因論』までの段階で、「無意識」を含めた「意識の分裂」を認めたことによりすでにその萌芽があると言ってよい。

『ヒステリー病因論』までの段階で、「意識の分裂」として、無意識的な心的部分を仮定したことには、患者の表わす複雑怪奇な症状を理解しうるものにしてくれるという、医師にとっても患者にとっても実際的な目的がある。人間は、何の脈絡もない無秩序の事象の集合には耐えられないからだ。ヒステリー患者の症状がまさにその無秩序なのであり、患者自身それをどう秩序だててよいか苦しむ。人間には秩序だてて理解を求める志向性があるとして、心的な「無意識」を仮定するということは、他者に意識を仮定し、その行動から再構成して他者を秩序ある人格として理解することと変わらない。⁽²⁴⁾

『病因論』のなかで展開している主張によれば、ヒステリーの症状が発生しさらに維持されるためには、まず、幼児期の性的体験が無意識的回想としてなければいけない。症状の解消は、無意識的回想と意識的回想とに分裂していた状態を解消し、互いに遮断されていた無意識と意識との諸観念の間に関連を形成することによって実現される。すなわち、意

識を脈絡のとれたひとつの統一体として理解することと一致するのである。

注

- (1) J. カラーは近代言語学を確立したソシュールとフロイトを比べて次のように言っている。「かれ〔ソシュール〕は二人の偉大な同時代者、社会学におけるエミール・デュルケム、心理学におけるジグムント・フロイトとともに、人間の行動の研究を新しい基盤の上に据えることに力があつた。」J. カラー、川本茂雄訳『ソシュール』（岩波書店、1978年）、p. 1.
- (2) 『精神分析学入門』（中央公論社、懸田克躬訳、1973年）、p. 530.
- (3) アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』（紀伊國屋書店、1969年）、p. 199。フロイトが、1887年から1902年にかけて親交をもったヴァイルヘルム・フリースにあてた1896年の手紙のなかの言葉。同じ手紙のなかで、「私が何のためにこの世にいるのかわからなかったところに、哲学こそ私の抱いた最初の目的であつたのです。」とのべている。
- (4) 「これらの（精神病理学についての）考察のはるかかなたに、私の理想の子でも問題の子でもある、メタ心理学がひそんでいるのです。」（ジョーンズ、同書、p. 199.）「私は、意識を越えたかなたに及ぶ私の心理学にメタ心理学という名を用いてよいか、どうかあなたにまじめにおたずねしたいと思います。」（同書、p. 237）
- (5) ジョーンズ、同書、p. 232
- (6) ポール・リクール『フロイトを読む』（久米博訳、新曜社、1982年）、p. 179.
- (7) それぞれ、第一の局所論、第二の局所論と呼ばれている。前者はフロイトの初期の論文から用いられている。後者は、1920年の『快楽原則の越えて』以後発展させられた
- (8) Ann Jefferson and David Robey (eds.) *Modern Literary Theory* (London : Batsford Academic and Educational; 1982), p. 113.
- (9) フロイト『夢判断』（高橋義孝訳、新潮文庫、

- 1969年), 上巻, p.174.
- (10) 同書, 上巻, p. 357. むろん, この場合は, 「夢の仕事」(dream-work) について言っているから, 分析者は, 夢内容を夢思想に「翻訳」しかえさねばならない. 次の注を参照.
- (11) 『精神分析学入門』(上掲中央公論社版), p. 595.
- (12) アーネスト・ジョーンズ, 上掲書, p.186.
- (13) 宮本忠雄・小田普「精神分析と構造主義」(『現代のエスプリ, 第47号, フロイト』, (至文堂, 1971年) 所収p.100.)
- (14) ポール・リクール, 上掲書, p.6.
- (15) アーネスト・ジョーンズ, 上掲書, p.170.
- (16) 1896年以前にも「精神の分析」という言葉はしばしば用いていたが, まだ自分の方法を「ブロイエルを通利療法」と呼んでいた。「精神分析」をひとつの用語として用いたのは, 1896年のことだという。『ヒステリー研究』は, ブロイエルとの共同執筆による。ブロイエル執筆の部分はのちのフロイトの著作集からは除外されているものもある。
- (17) ジョーンズ, 上掲書, p.183. フリースに対して書き送った手紙のなかで「過去二, 三ヶ月の間徐々に気がついてきたある大きな秘密」として打ち明けたとジョーンズは述べている。
- (18) ジョーンズ, 上掲書, p.183.
- (19) 「ヒステリー病因論」(フロイト選集第9巻『ヒステリー研究』(日本教文社, 1969年) 所収) p. 357.
- (20) 「ヒステリー病因論」, 同書, p. 351.
- (21) ここで「無意識」という言葉がつかわれているが, まだ局所論としての, 心的体系のなかの「無意識」として用いられているのではない。むしろ, 「ヒステリーの心的機構について〔予報〕」のなかで述べられている, 「類催眠状態」に近いものとして用いられていると思われる。「類催眠状態」は「催眠様状態」と訳されることもある。フロイトがブロイエルとともに, 催眠療法を用いたころに用いた言葉である。フロイトは, 催眠療法はヒステリーの根本的解決にならないとして放棄した。
- (22) ジョーンズ, 上掲書, p.184. 1914年の『精神分析運動史』からの引用である。
- (23) ジョーンズ, 上掲書, p.184. これも, 『精神分析運動史』から。
- (24) ポール・リクール, 上掲書, p.132参照。「無意識を仮定することは, テキストに意味や脈絡を導入する加筆の作業に等しい。この仮定は必要であるだけでなく, 正当でもある。なぜならこの仮定は, われわれが他者の意識をその行動にもとづいて再構成するのと本質的に変わらないからである。」